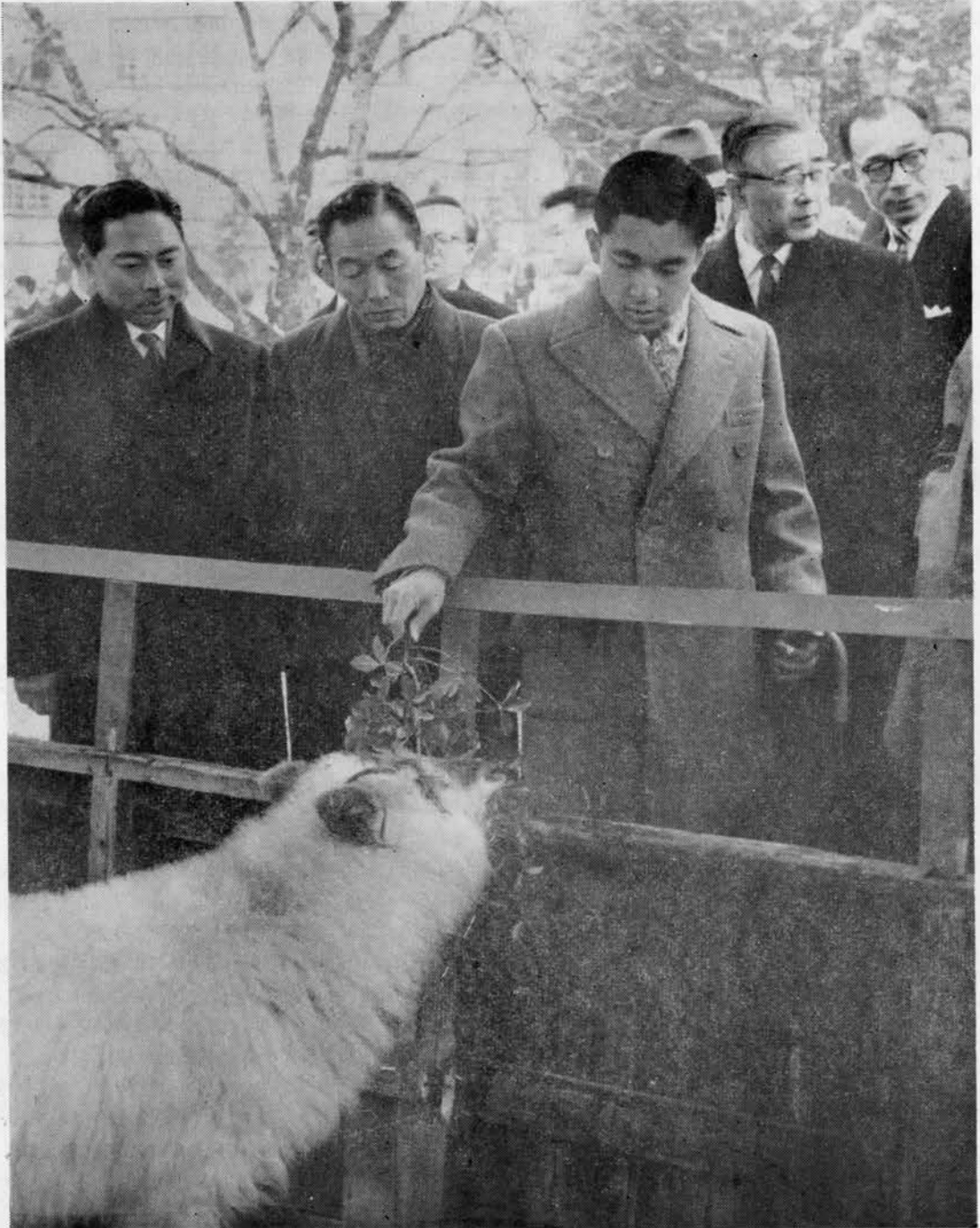


# 山と博物館

第6巻第4号 1961年3月25日 大町山岳博物館



カモシカと皇太子殿下

3月27日、皇太子殿下は山岳博物館をご視察になり、ライチョウなどのことについてご質問されたあと、天然記念物カモシカにマサキの小枝をお与えになった。

# 地域の課題と博物館

海川 庄 一

## 1、博物館の機能

昨年九月、日本で開かれた「アジア太平洋地域博物館セミナー」で採択された最終勧告の第1項に「博物館は地域社会の文化センターとしての機能を果たすべき機関と考えるべきであり、その収集・保存・研究ならびに教育活動は同様な重要性をもつものである」と示されている。博物館を単なる展示場又は資料庫的な施設としてではなく、生きて働く社会教育機関としてとらえ、更に四つの活動を欠くことのできないものとしておさえている点は重要である。これらの点については、博物館法施行以来もう何年間も我々の間で論ぜられて来た点であり、原則論としては疑う余地もないものと思う。しかしながら、一口に博物館というもの（それは実にさまざまである）を地域社会の文化センターとして規定し、活動を形態的に分析し、収集・保存・研究・教育という四つの側面を強調するだけでは不十分である。現場の我々としては、先ず第一に自分たちの博物館が対象とする「地域社会の広がり」と、そこにおける住民の「生活要求」更には生活要求を達成するための運動の中から当然生れて来る「教育要求」又は、「文化的要求」を正しく把握し、その上に立って、自分たちの博物館が果たすべき役割りを明らかにしなければならない。

## 2、教育環境の創造

国民一人一人は、誰でも「健康にして文化的な生活を営む」権利を持っている。そして、このような目的を達するためには、当然、それに必要な知識・技術を学びとる自由な学習の権利が保障されると共に、自主的な教育要求が正しく成長するための社会的な環境が整備されなければならない。しかしながら、今日の社会は大衆の健康な文化的要求を満たすためには、あまりにも貧しすぎる。このような現実の中にあっては、我々は生活を良くする運動と学習や教育を切り離して考える立場では駄目である。近代的な意味における社会教育機関の役割りは住民一人一人のより幸せになりたいという人間的な願望と結びついて提出されるところの学習の要求を組織し、公的な措置にまで発展させることである。

このような機能は当然、公民館・博物館・図書館が協力して総合的に果して行かなければならない。ここに於いて、当然、現実とは未来へ発展する条件として肯定されると共に、理想との対比によって否定され、新しい「村づくり」「町づくり」の運動としての博物館活動が生れて来る。そして、その方法としては、人間形成を通じての社会改造という教育的方法と、観光開発や自然・文化財などの保護施策による文化的環境の創造という行政的

方法との二つが考えられる。私は、博物館が地域社会の文化センターとして立つためには、この二つの方法のどちらをも捨てるべきではないと思う。

## 3、市民と共に歩む道

大町山岳博物館の設立趣旨からすると、その対象とする地域社会は日本全体にも及ぶことになる。然しながらその中心はあくまでも郷土であり、発展の現段階においては、具体的に限定するならば大町市である。このことは本邦唯一の山岳博物館とは云え、市立博物館としての建前からして一面当然のことでもある。従って大町山岳博物館は大町市によって養われる一方、市民へのサービスに徹しつつ、大町を育てて行く責務を負わされている云いかえるならば、山岳博物館は大町という地域社会とそこに住む市民と共に成長してゆく博物館である。「郷土に生き、郷土を愛する博物館」であろうとすることは我々の博物館活動が少しづつではあるが、実を結んで来たということと深いつながりを持っている。十数年前、この町の青年達はいまわしい戦争の痛手の中から、新しい民主的な文化を求めて博物館創設運動に立ち上ったのだった。あれから今日まで、山岳博物館と郷土のために寄せられた多くの人々の努力は全く尊いものだった。私は今、この博物館を支えている多くの同志や先輩たちの純粋な善意の中で青春の十幾年を過ごさせて戴いたことを感謝すると共に、山岳博物館を大町市民のために役立てなければならないと思っている。

## 4、北ア開発の情勢

本紙の1月号で阿部さんが指摘しておられるように、いま、北アルプスの自然は、市民の生産と福祉に結びついて大きく転換しようとしている。ここまで到達する迄には、山岳博物館も微力ながら努力を傾けて来た。我々は今までの成果の上に立って、新しい展望を行なわなければならない。ここで北アルプス開発の客観情勢を眺めてみよう。

①国民生活の一応の安定と共に、国民の余暇利用乃至はレクリエーションを求める傾向はますます高まり、登山スキー人口は全国的に増加の傾向をたどっている。

②昭和三十八年夏には関西電力黒部川第四発電所工事の完成にともない、大町ルートが解放され、おびたゞしい数の観光客が大町を訪れると共に、秘境黒部峡谷が国際的観光地として脚光を浴びる見通しである。

③昭和三十九年に予定されている東京オリンピックは日本アルプスと山都大町市を世界各国に紹介できるチャンスであり、この時期を目標として、大町市の文化的、観光的諸条件を整備することが期待されている。

④昭和三十一年度より推進して来た針ノ木自然園の構想は、三十五年度に於いて市観光課を中心として強力に展開された。その結果、長野県に於いても観光開発公社が発足し、籠川流域の開発は実施段階を迎えた。

⑤昭和三十五年度に於いて厚生省が、山岳博物館を含む針ノ木自然園の構想をほぼ全面的に盛り込んだ針ノ木岳周辺地域の国立公園計画を策定し、扇沢地域を集団施設区域に指定したことは、山岳博物館の今後の発展を約束するものである。

⑥昭和三十五年度において大町市は葛温泉よりの引湯を決定すると共に、上原、日向山、大久保原等の観光開発計画を策定した。引続いて現在、仁科三湖ブロック、鹿島川ブロック、東山ブロック、乳川ブロックなどの開発構想が検討されている。

⑦長野・大町間を結ぶドライブウェイの構想は、県ならびに関係市長村の間で現在検討中であり、本年度から本格的な調査が行なわれる段階にある。

このような客観情勢を考えると、今後山岳博物館が関係諸機関との提携の下で、果して行かなければならぬ使命は極めて大きいと見なければならぬ。

## 5 自然保護の諸問題

大町市の観光はその優れた自然を資源としている以上開発にとって特に考慮しなければならない問題は、自然保護の問題である。全国的に見ても、資源の集約的な開発によって、国土の自然景観を保持することは極めて困難な状態にあり、昨今、自然保護の必要は痛切に叫ばれている。山岳博物館では郷土の自然を保護するため、関係機関との協力の下に、現在、次の諸施策を進めている。

①籠川谷、高瀬渓谷に棲息するカモシカ、ニホンザル等を厳重に保護するとともに、その生態を明らかにすること。特にニホンザルについては餌付けを行うこと。

②北アルプス一帯に棲息するライチョウの生態を研究し、その保護と増殖を計ること。ライチョウ生態調査は昨年以來、長野県科学振興会の助成を得て、北アルプス鳥獣研究グループが、本館と協力して進めている。

③カモシカ生態園を開設し、カモシカの研究と増殖を進めること。このため、本年度中に博物館裏山に約一万平方メートルのカモシカ放飼施設を建設したいと思う。

④高山植物の生態を研究し、保護施策の充実を計ること。特にコマクサの生態研究は、昨年より長野県業務課からの委託を受けて進めている。

⑤博物館苑地及び居谷里地域を含む東山一帯の禁猟区に於いて鳥獣類の保護、増殖をはかること。このため関係機関と提携し、適所に巣箱、餌台等を設置する。

⑥木崎湖において、オオハクチョウ並びに鴨類を保護し、水鳥生態園を実現すること。この運動は地元の方々

の熱意によって、現在順調に進められており、近く、木崎湖は全水域が禁猟区として指定される見通しである。

⑦自然愛護思想の普及をはかること。山岳博物館では博物館友の会の活動を通じて、小中学生に対する自然愛護思想の普及につとめているが、更に、この活動を各階層の人々の間に広げて行く必要がある。このために三十六年度に於いては特に探鳥会などの集会活動や、有線放送を通じての市民に対する普及につとめる方針である。これら自然保護に関する幾つかの仕事は忍耐と努力を必要とする極めて困難な仕事ではあるが、我々は必ず成し遂げなければならない。

## 6 地域の科学センターとして

地域社会の文化向上の上で博物館は公民館、図書館、各種の社会教育関係団体、文化サークル、関係行政機関等と十分な連携を保って仕事を進めて行かなければならない。大町の場合、総合的な観点から地域社会における山岳博物館の使命を考えるならば次の四点に示されるであろう。

①観光開発研究機関並びに北アルプス案内所としての働き

②市民の教養・レクリエーション施設としての働き

③自然並びに文化財保護機関としての働き

④地域の視聴覚・科学センターとしての働き

人類の未来はますます高度の科学性と創造性を要求する時代である。

科学教育は今後、学校においては勿論のこと、社会のあらゆる分野に於いて強調されていくことであろう。山岳博物館は創設以來博物館友の会などの活動を通して、青少年の科学的知識・技能の向上をはかって来たのであるが、今後一層組織的な活動を高めて行くべきである。特に科学教育の面で市内小中高等学校とは継続的な提携体制を確立する必要がある。学校の正科時間における、博物館資料の利用についての要求に対しては、単元に即応した貸出資料の整備と、運搬用自動車など機動力の整備をもって応えねばならない。一般勤労青年の学習に対しても博物館は充分な便宜を与えるように努めねばならない。考古資料や歴史資料は科学的な正しい歴史を学ぶ手がかりとなり、人種的な偏見を乗り越えて行くことにも役立つであろう。又、郷土の民俗資料は単に伝統的な文化を理解するに役立つだけでなく、現在の文化や技術が民衆の生産的な労働とどのように結びついて発展して来たかを知るのにも役立つことであろう。

世界は宇宙時代に入ったというのに、我々の博物館には未だ一台の天体望遠鏡もない。然し、我々は科学センターとしての博物館の未来像をえがきつつ希望をもって仕事に取り組んでいきたい。(山岳博物館・主事)

## つべたの爺

— 柏原長寿氏 —

春めいて来た3月中旬「つべたのじじ」こと柏原長寿氏を訪ねて見た。3月とは云え風はいまだ冷たく、山は雪で真白に輝やいている、ここ、大町市平区借馬の自宅でコタツにあたり2人の孫を相手にしていた。

## 17才で山へ

「じじ」（冷小屋に集まる連中は皆こう呼んでいる）の生れたのは明治34年2月22日だから今年で62才になる訳だ。

本年62才とは云え毎年この「じじ」が夏山の小屋番に姿を見せなかったことはない。小屋開きの荷上げ（小屋を開くにあたり必要な、食器、炊事具、寝具などを運び上げる）には若い者と一緒に5貫位の荷を背負い、荷上げから小屋の修理箇所まで、采配をふるうかくしゃくたるものである。

そもそもこの「じじ」が山に入りはじめたのが17才だから、もう山に入って45年になるわけで、最初の山が強力として針ノ木越えから立山、それが病みつきとなり、当時、平村（現大町市平区）経営の石室が、針ノ木大沢小屋のすぐ横にあった、

その小屋番を引きうけて2年。客の少ないときは、大沢小屋の故百瀬慎太郎氏（旧対山館主人）といりりをかこんで話をするのが楽しみだったと云う。

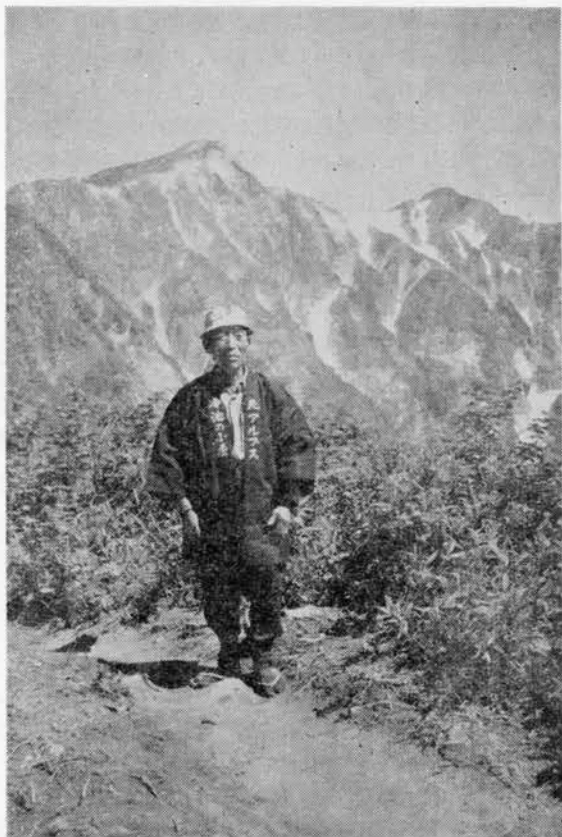
それから間もなく爺ヶ岳の横に種子池小屋が出来てそこに移り管理するようになった。

それも、今あるような立派なものではなく2間に9尺の石室であった。その頃はそれで良かったのが、除々に客も増して、昭和5年には木造に作りかえた。作りかえてホッとしたのもつかの間、翌年小屋の修理もかねて行ってみると、ベチャンコにつぶれていたのである。それから小屋を閉めて降りる時には、小屋をたたんで（組立式にしてあり翌年の小屋開きには組立てる）下ることにしたという。

## 念願の小屋を買う

村の経営であるために、小屋を好きなように作りかえたり、修理も思わなければならないので、何とかして自分のものにしたい、そうすれば炊事場は、こうなおせばまえよりずっと使い良くなるし、便所も……と長い間おもいつづけていた。

昭和8年、村より一切を借り受けてはりきったものの16年の年には、戦争ほっ発のためお客は姿を見せなくなり、やむなく小屋を閉鎖した。その時の家賃が1年間130円であったという。戦争がはげしくなった昭和18年、冷池小屋と種子池小屋を村から買いとった。



冷池小屋前の柏原氏

長い間手入れをしない小屋は荒れ放題であったが、柱のキズ、土間の土にも長い間の想い出があり、何んともいえない嬉しさがこみあげて来たとのことである。

## 水枕の酒

鹿島の冷小屋にホッカ（食糧などの荷上げ）した連中ならば、一度は背負わされるものに「水枕」がある。これが「じじ」にとっては楽しみの一つである。中味は「酒」で水枕一つに2升（3.6ℓ）入るといふ、家族も、こころえたもので、そろそろ終る頃だと思われる頃には別の水枕が上ってくる仕かけになっている。「「じじ」いたかい」と顔を出すと、「わりゃ、ひさしぶりだなチヨイト、こけえ来て、イッペやれ」と水枕のものを、こちそうになった人は少くない。

7月の中旬になると、地元の高校の集団登山がある。何日に来ると連絡があると、朝から落ちついていられない「へえ、来たずらか？」「雨降らなきやいいが」、最後には、尾根に出て待っている。

キャンプファイヤーが赤々と燃える頃には、山の閑気を



孫と一緒に 自宅前にて

ついて、若い人々の歌声がはるかに谷すじを流れていく。「じじがひとつやるかな」と、ひときわしふい声が夜の谷にひびき渡る、～北は鹿島槍、南は連華、中をとりもつ爺ヶ岳～ときおりパチパチと薪のはぜる音が聞こえてくるだけである。

### 足のあるへび

「クマはクマ、クマってなくじ、ありゃ何年の年だったづら、西沢録四郎もいたし、富山営林署の熊四郎さもいたしね、朝、夜明けがたたったが、はじめてクマのなき声聞いたね、ふんとにクマはクマー、クマー、ってなくじ、なんしろ、ノノビキ(布引岳)あたりや、ありゃクマの巣だじ」

オオジヨ(ヤマイタチ)がチョイ、チョイ小屋の中に顔を出すとただあって、山の動物は多く、「ライチョウはねへえ、どうも、お花畑の上にヒトスゲ(1対)いるし、チイ(爺ヶ岳)の横つらにやフタスゲいるな、うん……………ノツコシにいるな、あすこにゃ、ヒトスゲ、ノノビキのテントはる雪渓があるじゃねえかいあすこにゃムスゲや、そこらにはいるじ」特にライチョウは後立山では、白馬と鹿島槍と爺ヶ岳が多いことが上げられる。

「樺小屋ってむな、ありゃ、カモシカの巣だね。それにせ、チョイ、チョイ見るだが、樺小屋乗っ越し(種子池小屋付近)あたりや、ヤマドリがいるね(種子池小屋2269.8m、ヤマドリは800~1,500mに棲息する一日本鳥類大図鑑)、「20年くれえめえだったずらか、冷ノツコシで足のあるへびを取ったことがあるじ、南原(現大町市南原町)の増田がネズエ(ポッカ用のトビ)でたたいてとったがね、アオデシヨ(青大将)のような色して、足が4本腹にひっついてたじ……………増田の野郎皮むいてくっちまったがね」「サンショオとちがうじ、タネ(種子池小屋)にや石室のころつからサンショウウオがいたで、しってるじ」

今になって思えばアルコール漬けにでもして保存しておけばよかったと話してくれた。

### 浅間の煙

「じじ」が小屋番になる前には、二人の前任者がいたが、2人共遭難してしまった。

昭和6年に建設された当時は、荒井充栄氏が管理をしていたが、冬山をやるといって、赤岩尾根で雪崩に襲われ死亡し、次の吉沢浦一氏も秋に岩場から転落死亡してしまった。「じじ」は登山者の遭難を一番恐れている。

天候の悪くなるときなど、登山者に注意して歩く「浅間の煙りが、北にむいてりゃ晴れ、南にむいてりゃ4、5日のうちにゃ天気は悪くなるじ。」

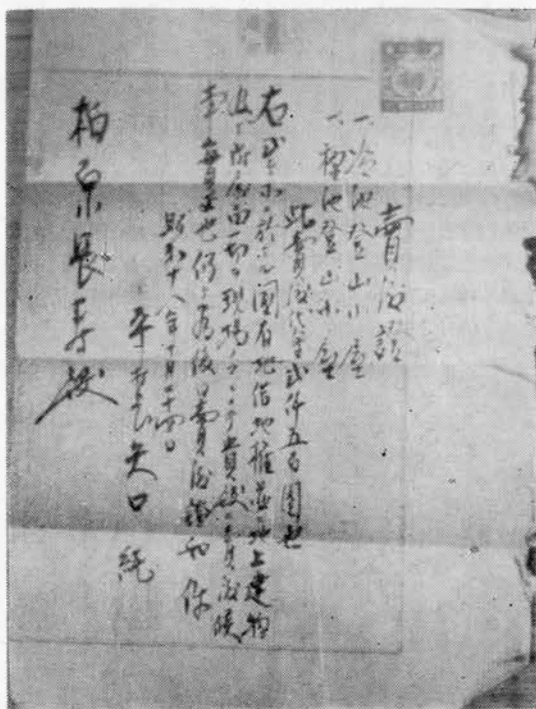
一番つらいのは水汲だと云う、天水が唯一の水源であるこの小屋も、水がなくなると樺小屋沢まで水を運びに行かなければならなくなる。朝、お客が水を水筒につめていけるように、何時も用意しておくようにしているという、「水筒の水くれ、持たせてやらなけりゃいけねえ小屋番をやるなら、そのくれえの心がけがなけりゃ……………」と、じじはいつている。

### 二代目

今も2人の孫を相手にニコ、ニコしている「じじ」のヒタイのシワの一本一本に当時の苦勞がぎざみ込まれているようだ、「働けなくなるまで小屋番をやる」というじじも、今では、山の好きなムコさんを迎え、何かほっとした気持のようだ。

種子池と冷小屋をしょっちゅう忙しげに歩きまわって世話をしている柏原正泰さんと、これからは「じじ」にかわって、鹿島とともに生きていくことだろう。

(千葉林司 山博学芸員補)



小屋の売り渡し証書

# 百瀬慎太郎歌碑

—北アルプス大沢小屋畔—

いつか機を見て大沢小屋の歌碑をもちど訪れたいと思えた。任地が北信に移ってからなので、中々思うに任せなかった。いわば宿願の如きものになっていた。

それこれしていると、思いがけずその好機がやってきた。時は去年9月下旬、あらかじめ山岳博物館へ連絡をとって、いよいよ現地へ向うことに段取りががついた。ハマ組の定期バスに便乗することができたのも、ひとえに博物館のはからいによったことだった。

北大町駅前発10時。広い路が龍川の峽を奥の奥まで続く。昭和31年7月、蓮華岳へ登山したときは、関西電力工事のためのこの道路の開サクが始まろうとしていたのだった。扇沢を越え、一段と高い工事拠点につく。いよいよ登山路にかかる。同行は若い友人仁科孝さん一人。その後、道は荒れたのか、心細いほど狭い。

雲ゆきの怪しさが僕たちの足をいやにせきたてた。

なだれたる岩塊のおびただしき

足もとに目を落しつつ飛びつたひゆく

河床をわたったり、岩場を横切ったりした

数年前の記憶は殆ど役立たなかつた。

きり立つ岩壁の真下

底深き狭間にあへくわが身の小ささ

峽の奥

岩のとがり針の木岳

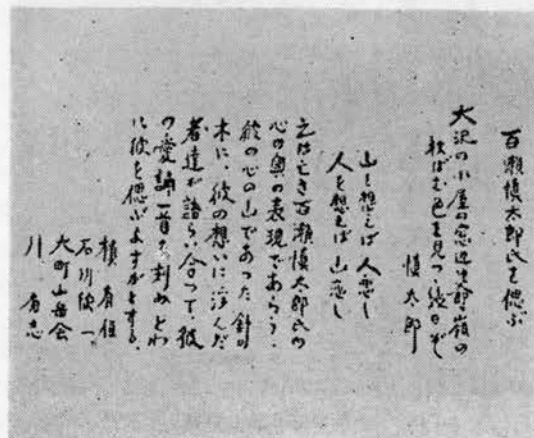
左望なる峠は見えぬ

ゆくても、左右も、きり立った岩山の屏風。その山頂が折しも色づいている。こぼれ陽がそれをひとしおひき立てている。

赤沢もスバリも蓮華も中天にそぎ立てるもの

秋はむ岩肌

雨粒が当りだした。さいわいに、それは程なくやんだ。急ぐ最中に、ひよっこり小屋の前にでた。季節はずれの小屋はしずまり返っていた。歌碑は小屋の右裏。登山路からまともな自然岩。歌文と略伝を、二枚の銅板が二段にはめこまれている。岩は高さ二メートル。数年前の記憶



# 福沢武一

はなに一つとどめていない。

ともあれ、仁科さんに写真をとってもらった。あらゆる角度から試みるシャッターの音が続いた。その成功を祈りたい気持だった。

次に、二人は拓本を試みた。略伝は、ブドー唐草の縁どりの中に陰刻になっている。これは細字で、乾拓の方が適当。歌文の方は、陽刻。字づらが不揃いな点、容易にはいかない。幾度か打ち直す間に、たちまち三時間たった、それは感激の時間だった。

銅板は底ごもり鳴る

山小屋の歌碑にたんぽを打つ時の間を

煩をいとわず、ここに歌文を写しとると、百瀬慎太郎氏を偲ぶ

大沢の小屋の窓辺ゆ爺ヶ嶺の秋はむ色を

見つつ幾日ぞ 慎太郎

山を想えば人恋し

人を想えば山恋し

之は亡き百瀬慎太郎氏の心の奥の表現であろう。彼の心の山であった針の木に、彼の想いに浮んだ者達が語り合って、彼の愛語一首を刻み、とわに彼を偲ぶよすがとする。

楨有恒 石川欣一 大町山岳会 外有志

高さ26センチ、幅40センチの銅板。——山を愛し、生涯を山に生きた百瀬氏のおもかげがここにハウツと浮かんてくる。高さ18センチ、幅43センチの、もう一枚の銅板によって氏の略伝を記すならば、

明治25年、大町の旧家対山館に生れた。同39年、白馬岳に初登以来、北アルプスの諸峯を踏破。42年、大町中学卒業、日本山岳会入会。大正2年、ウエストーンを知るこの頃から短歌に心懐をよせ「アララギ」「創作」などに発表。翌3年、雑誌「白馬岳」編集。5年、当大沢小屋建設。翌年、大町登山案内人組合を組織。12年、立山針ノ木冬山登山に成功。昭和5年、針ノ木小屋建設。楨有恒・冠松次郎・石川欣一の諸氏を初めとして、内外の山岳人と交遊。24年、68歳で他界する直前まで登山をやめなかった。碑の建立は、昭和28年に当る。

以上は、殆ど銅板からのひき写し。一面識もない僕であってみれば、それが最も有力なよすがでありはする。

なにはともあれ、氏が純粹な魂だったことはたしかだ生前にこよなく愛した小屋のほとりに、いまま氏の魂が楽しくよみがえってくる。ここに見る爺岳は氏の主題歌に歌われている秋はむ色が徐々に深まりつつある今日この頃。僕も心の中で氏に唱和した。

爺岳は七合目までが色づきぬ

小屋のほとりに見放けてわが立つ

(屋代東高校教諭)

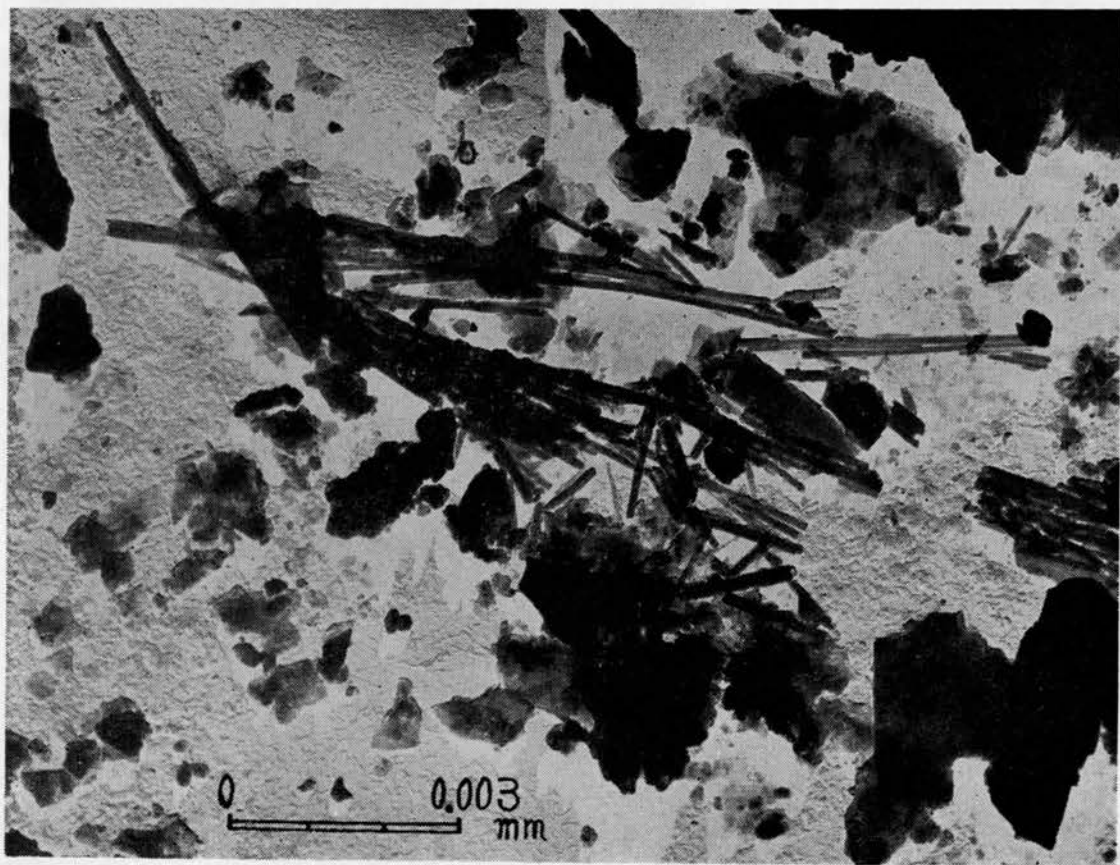
## 岩石薄片の顕微鏡観察 電子顕微鏡の世界

太田昌秀

前回まで私は、岩石を薄くすりへらして、ガラス板にはりつけ、これを偏光した透過光で観察すると、どんなことがわかるかということの説明してきました。この方法では、大体、数十倍から数百倍にものを拡大して見ることができます。こうして見ますと、私達が自分の眼で見ることのできる石の姿とは、ずいぶん違った世界がみられることがわかったことゝ思います。私達が肉眼でものを見るときに尺度は、**m** とか **cm** 位が丁度良い位で、**km** や **mm** になると少し扱いにくくなります。それよりも大きかったり、逆に小さかったりすると、もう肉眼では測定できません。小さいものゝ世界は、いろいろな組み合わせの光学レンズを用いて拡大できますが、せいぜいのところ **0.001~0.0001 mm** はなれた2つの点を区別してみわけられるのが関の山です。ところが、いろいろな物質の究極的な粒子と考えられる原子は、10の下に0が8

つづいた数で**1cm**を割った位の大きさしか持っていません。人間は、科学が進むに従って、このような極微(マイクロ)の世界をどうしてもものぞいてみたくなって、いろいろ苦心しました。その結果、電子線という非常に波長の短い光(眼には見えません)を使って、ミクロン(1/10000%)位の小さいものをみわけることができるようになりました。これが電子顕微鏡です。今まで、光学顕微鏡で、最高千倍位にしか拡大できなかったものが、電子顕微鏡によって、一挙に数万倍~数十万倍に拡大できるようになったわけです。このように拡大された世界は、今まで光学顕微鏡でみてきた世界とはまったく異った単位の世界で、思いがけないことが沢山見つかりました。今回は博物館に少し費用を噴発してもらって、いつもより写真を大きくのせてもらうことにしましょう。

(北海道大学地鉱学教室)



アラスカ、メンデンホール氷河モレーンの表面についていた粘土鉱物

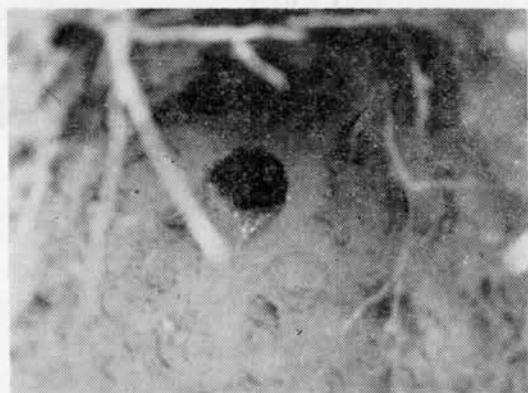
## カワセミ

長 沢 修 介

美しいこの鳥を人呼んで翡翠という。

その春の美しい宝石の翡翠色を指すのだろう。古来から絵画の材料にもなって親しまれて来た鳥であるがその巢を知る人はあまりに少ない。他の鳥は巢と共に描かれたものを多く見るのにこの鳥のは今迄に見たことがない。大方は小魚をくわえている所か、川辺を飛んでいる図である。本当の生活があまり知られていないためであろうカワセミは元来漁夫である。普通は川辺の棒抗などに止ってじっとして魚を見付けるとドボンと飛び込んで捕えて生活している。巢は他の種類とは異って土中に穴を掘って作るのである。沢山の鳥類の中で土中に穴を掘って巢を営むのはカワセミとその一族だけである。崖地や土手の崩れた所にぽっかりと巢穴があり本当の巢の主体はずっと奥深く土中に秘められている。それ故知らぬ人は鼠穴と思ってしまう。

即ち、崖面に径5~6%の巢穴があり巢への隧道は同じ大きさで少々上り勾配に60%~100%の長さがありその奥に拳が入る位の産座がある。だから蕃殖期カワセミはこの穴掘りの土工屋にもなるのである。まず土質の選定であるが崖が垂直かそれ以上の急なものであること、そして砂土でなく小石や樹の根のない湧水や湿気の少ない所が要求される。適当な崖が見付かると土工の本領を發揮してあの長い太い嘴を持ってツルハシ代り工事を始める。まず巢口をめがけて一直線に飛びかかり一口ガブリッとやっってはじき返された様に引き返し土を捨て又突撃



するとといった動作を繰り返す。そして巢口が出来ると今度は中へ入り長い嘴をツルハシにして土をくづし三ツ指のくっついた小さな足をスコップにして後向きで土を外にかき出す。この間に潔癖性の彼は絶えず水の中に入り体の泥を落すことを忘れない。この様にして適當の長さの抗道が掘れると今度は産座が作られやっとう頭の方から出て来ることができるようになる。産座ができるると今度はその中に敷く物であるがこれが又他の鳥の様にコケや草を敷くのではなく漁夫である彼は魚の小骨を敷くのである。それもそこいらから拾い集めて来るのではなく自分の食べた小魚の不消化物として吐き出されるペリットの小骨なのである。このようにして純白の産座が出来るとやがて真白な円い卵が産みこまれる。そして親鳥の懸命な育雛がやがて実を結んであの目のさめる様な春の翡翠色と濃栗色の胸を持ったカワセミが生れるのである。

## 資 料 寄 贈

OMCレポートNo135奥多摩山岳会、吉野熊野伊勢志摩、両国立公園地域拡張調査書、三重県立博、京都山岳京都山岳会、登山ハンドブック 登嶺会、白馬岳と後立山 登嶺会、山口県の自然No4 山口県山口博、1961 2月会報、京都趣味登山会、REPORT No62 谷の影山岳会、同志No14 山岳同志会、モンキーNo39 日本モンキーセンター、Nature Study No11V.2 大阪自然科学博、登攀No252.253東京緑山岳会、四つばしNo2, 1 大阪市立電気科学館、山階鳥類研究所研究報告No2, 15 山階鳥類研究所、葛城記念号No130泉州山岳会、平倉演習林の昆虫相紀北、紀南の陸貝類(第一報)市橋

甫、大杉大台ヶ原自然科学調査展示資料目録並びに調査報告No1 市橋甫、山と自然No1九州山岳保護協会、信越国立議院境観念の成別刷 広瀬誠、目録(自然科学の部)熊本博物館資料分類 熊本市立熊本博、まどのゆきNo40積雪科学館、わらじ No37わらじの仲間、山とスキーの会会報No134 山とスキーの会、岳友No56岳友クラブ、稜友No40 東京北稜山岳会、比婆科学No4 Vol.8 比和町立比和科学博、大多摩観光情報No13大多摩観光連盟、生物研究No5.1 県立利根農林学校、ハイカーNo65山と溪谷社、山と溪谷No265山と溪谷社、山嶺No271 東京野歩路会、会誌No2 Vol.31. No1 明峯山岳会、自然科学と博物館No271、11-12 国立科学博

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料170円(郵送料とも)を現金書留または郵便替為、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第6巻第3号 1961年3月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場